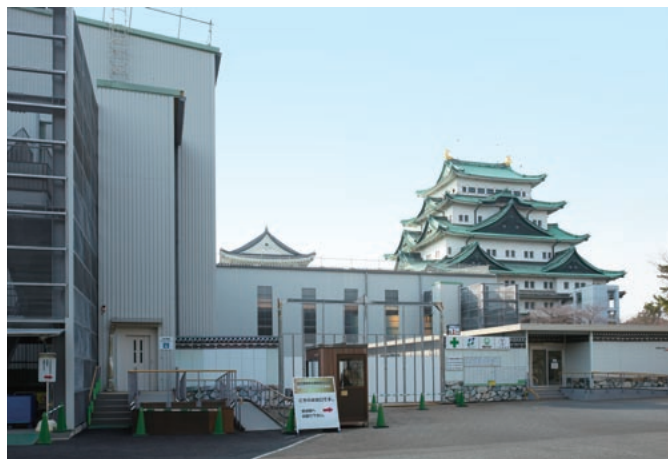
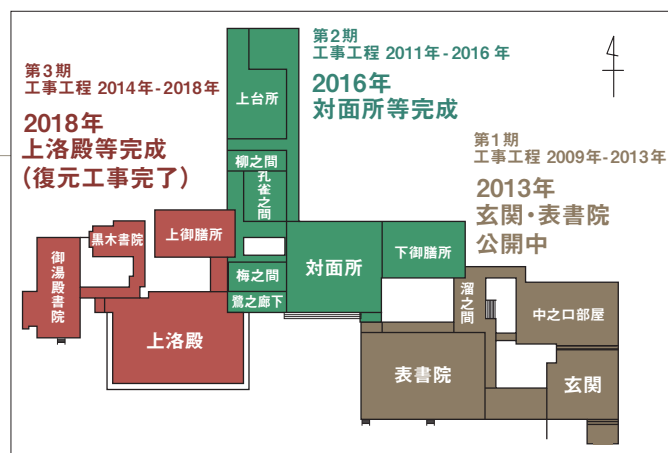




現場に架けられた素屋根の向こう側には、名古屋城天守閣が見える。



本丸御殿平面図。現在は二期工事が進められている。

発注者：名古屋市
設計・監理：株式会社文化財工学研究所
施工者：安藤ハザマ・松井・八神特別共同企業体
工期：平成21年12月1日～平成26年1月31日（予定）

工事概要

近世城郭御殿の最高傑作

名古屋城本丸御殿は、天守閣の南側に建てられた平屋建ての建物で、延べ床面積が約三、一〇〇平方メートル、最大高さ二二・五七メートルを有する。近世城郭御殿の最高傑作として、国宝である京都二条城の二の丸御殿とならび、武家風書院造の双壁といわれた建物である。室内は、豪華絢爛な障壁画や彫刻欄間などで飾られていた。「武」の象徴となる天守閣と「文」の象徴となる御殿の二つを備えた城郭は、地域のシンボルとなっていた。その歴史は今から約四〇〇年前にさか

のぼる。本丸御殿は、尾張藩主の住まいと藩の政庁として一六一五（慶長二〇）年に完成。一六三四（寛永一一）年、三代将軍家光が上洛する際に立ち寄ることができるよう、上洛殿や御湯殿書院が大々的に増築された。さらに、一七二八（享保三三）年には、防火や維持管理の側面から、こけら葺屋根が棧瓦に、木蓮格子妻が塗籠妻に改修された。今回の復元工事では、將軍の上洛に伴う上洛殿が増築されることにより本丸御殿の格式が最も高まった寛永期（一六二四～一六四四年）の建物を復元する時代として設定し、本丸御殿の歴史的意義と文化的価値を有する空

間の再現が試みられている。

総事業費は約一五〇億円で、資料によるとその内訳は、市費、国・県補助費、市民・企業からの寄付金それぞれ約五〇億円。全三期の工事を一〇年掛けて完成させる。現在は、第一期工事の玄関・表書院が完成し、第二期工事の対面所等復元工事が進む。

「旧状再現」と「見せながら」

「本丸御殿は、一九四五（昭和二十）年に天守閣とともに焼失してしまいましたが、文献や実測図・古写真・障壁画などの多くは焼失を免れました。こうした豊富な資料をもとに、原則として旧来の材料・工法を用いる『旧状再現』の工事を行っています」と吉原所長。名古屋城は、明治以降はすべて国有化され、一九三〇（昭和五）年名古屋市に下賜された。以来一九四三（昭和十八）年までに詳細な実測調査が行われ、その成果として「昭和実測図」が作成されている。焼失を免れた障壁画に加え、焼け跡から集められた焼損金具や拓本も残されているため、忠実に復元することが可能となる。

一方で、工事の受注にあたっては「見せながら」工事を進めることが、名古屋市より技術提案の課題として要望されていた。「職人の技と心の伝承はもちろんですが、市民をはじめ名古屋城を訪れる方々にも現場の作業風景を見せることで何かを伝承したかったのです」と吉原所



雨風の影響を受けないよう素屋根で覆われた空間内で、対面所等の工事が行われている。左手の建物はすでに公開されている表書院で、工事中の建物との境界がはっきりとわかる。

現場発見

匠の技と情熱 芸術の粋が 蘇る空間

名古屋城本丸御殿復元工事

東海地方の歴史と文化を象徴する名古屋城では、昭和二十年五月の空襲により天守閣とともに焼失した本丸御殿の復元工事が進んでいる。
江戸時代の芸術の粋を集めてつくられた本丸御殿。その空間を、伝統的な技法と現代の新技术を駆使して、当時のままに再現する。現場を進める安藤ハザマ・松井・八神特別共同企業体の所長・吉原一彦氏に取材した。



長は話す。工期を全三期に分け、約三年ごとに建物の一部を完成させていくことで、工事中から一般来場者に建物を公開することが可能になる。素屋根の架かる工事中の現場には見学専用通路を設け、原寸場、木材加工場、木材保管庫といった作業場も、一般来場者が自由に出入りできるようにした。一日約五、〇〇〇人の来場者と、再建を願う名古屋市民の声に応えたいという思いから生まれた提案だ。

伝統工法と最新技術の融合

素屋根の下の見学通路を歩くと、多くの職人が立ち働く姿を間近に見ることが出来る。木材運び、手作業で組み立てていく姿が興味深い。第一期工事で復元され、現在公開されている



素屋根内における見学専用通路の様子。工事の進捗状況に合わせて、通路の架け替えも行われている。

玄関・表書院では、その技術をゆつくりと堪能することができる。まずは外観。基礎部分を見ると柱と礎石面がおもしろい。通常平滑な礎石の上に柱を乗せるが、ここでは礎石の凹凸に合わせて、木柱の断面が加工されている。これは「ひかり付」という作業によって、礎石の凹凸を写し取り、木柱を加工する技術だ。使用されている木材はどうか。工事に要する木材は約二、〇〇〇立方メートルに及ぶ。使われているのは、東海地方及び全国から集められた国産の木材だという。吉原所長お勧めの場所を聞いた。「玄関車寄正面に配置された二本の鏡柱です。断面が約三七センチメートル×約二七センチメートル、高さ四・三メートルで四方無節という、松の最上級品です」。その上に鎮座するこけら葺屋根もすごい。車寄唐破風では巻き上がるような曲線を再現し、すべての屋根は一続きにつながっている。主に板厚三ミリの手割りした杉材を用い、竹釘で打ち付けて、立体的に仕上げられている。

建物内部に入ってみよう。最も特徴的なのは天井だ。身分と格式を重んじ、部屋ごとに異なる。順に、竿縁天井、竿縁天井に格縁を入れた格天井、格天井に子組の格子を入れた子組格天井、最終的には表書院にある上段の間では、支輪により一段持ち上げられた折上げ子組格天井へと、部屋の高が上がるにつれて豪華になっていく。取り入れられているのは伝統工法だけではない。「建物が完成すれば見ることができません

ています」と吉原所長。

この現場も、社寺仏閣工事に多い伝統工法による実証的な復元工事にとどまらず、耐震補強といった最新技術が組み込まれた複雑な工事だ。さらに、内装等も忠実に再現する。「すべての工程において、こまかく当時の資料を検証します。打ち合わせを重ねながら、詳細を決めていきますので、とても時間がかかるんですよ」。建物全体を把握しながら、多くの技術やその専門家を束ねる力が必要になるという。「大変なことも多いですが、この規模の復元に携わる機会はめったにありません。楽しみながらやっています」と、笑顔で話す吉原所長。復元された建物は、名古屋の未来の貴重な財産になる。二〇一八年の完成が待ち遠しい。



上／礎石の下には、戦災で焼け残った本来の礎石が遺構として残されている。遺構の保護として、山砂が手作業で敷き詰められ、その上にコンクリートが打設されている。
下／第一期工事で完成した玄関・車寄の様子。その左側には、工事が行われている素屋根も見え。工事中にもかかわらず一般見学者は多い。

Q あなたがこの現場で発見したことは何ですか？

A このプロジェクトは、400年前に建てられた第一級の建築を現代の木造技術の粋を集め、一つひとつの材料を厳選し、職人の技でつくり上げていくものです。当時の資料を残してくれた先人の英知と情熱、そして戦災を逃れた数々の文化財の価値と魅力がここに結実しています。復元された建物が将来再び重要な文化財となることを信じて、日々業務を行っています。

歴史と文化の脈流に刻まれた偉大な建造物の復元工事において、過去にこれほどの規模と質はないと思われます。職務にあたる作業員もまた、そのことを誇りに思って丹精を注いでいます。城下町名古屋のシンボルを再建し、「後世に残す」という目標のもと、現場は丸となっています。この時代に立ち会うみなさまにも、そうした思いが伝われば、光栄です。



安藤ハザマ・松井・八神
特別共同企業体
名古屋城本丸御殿作業所 所長
吉原一彦
Kazubiko Yoshihara



上／木材加工場の様子。すべての作業は一般見学者から見えるようになっている。
右／現場では、屋根の破風板の取付が進められていた。職人が手作業で建物の骨格を組み上げる。(提供：名古屋市民経済局名古屋城総合事務所)

